

博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	荻野 友範
論文題目	「詩言志」論の研究
<p>審査要旨</p> <p>詩は、長い歴史を誇る中国文学史のなかで最も根幹をなすジャンルであった。従って、「詩」とはなにか、「詩」は何を表現するものであるのかについて、歴代、さまざまな議論が交わされてきた。そのなかで最初に現れ、かつ後世に長く深い影響を与えてきたのが、本論文がテーマとした「詩言志（詩は志を言う）」という『尚書』舜典に見えることばである。</p> <p>本論文は、この概念規定の理解が時代とともに変遷してきたことを詳細に検討するなかで、とくにその最初期である戦国時代から漢代までの文献に現れた事例を精査し、この時代において「詩」がどのようなものとして認識されていたか、またそれがいうところの「志」とはどのようなことを指したものと考えられていたのかを解明せんとした意欲的な論稿である。</p> <p>論者は、まず第一章「古代中国における「詩」への視座」において、先秦時期に成立していたと思われる文献の中で言及される「詩」という用語の使用実態を整理し、「詩」が、詩句を指すもの、詩篇を指すもの、詩一般を指すものに分類できるとする。そのなかで、従来よく知られている儒家の「詩」の重視に対し、墨家がこれを音楽との関わりの中で批判すること、自らが「詩」を尊重するときには「先王の書」という形で権威付けし、また差別化して言及することをいう。文献上の調査はたいへん行き届いているが、墨家のいう「詩」が果たして「詩」全般を指しているかと断定できるか、また儒家の「詩」に対する評価と本質的に異なるところがあるのかなどの疑問の余地が残された部分である。</p> <p>第二章「「詩言志」研究史」では、まず『毛伝』以来の歴代の『詩経』注釈書、および『尚書』の注釈書において、「詩言志」がどのように理解されてきたかを検討する。それによれば、他の経書研究における同様に、漢唐の注釈、およびそれを継承した清朝の漢学と宋学との間では相違があり、宋代の新注では「詩」の誕生において、「志」の前に「性情」（陳経）「心」（朱熹）「喜怒哀楽」（李光地）といった感情的な心の動きを見ようとしていることを指摘する。しかし、古注・新注のいずれにおいても、「志」についての具体的な検討はなく、両系統ともに「ほぼ自覚された理性的なもの」として理解されてきたという結論を導き出した。</p> <p>この第二章において論者が最も力を尽くしたのは、さまざまな見解が提示されるようになる近代以降の中国における「詩言志」論を整理検討した部分である。その中で最も重要なものとして、朱自清「詩言志説」と聞一多の「歌與詩」における解釈、また文字学の方面からの研究として、これらに先行する楊樹達「詩言」を取り上げ、その所説を紹介するとともに詳細な分析を加えている。これに、前後して書かれるようになった中国と日本の「中国文学批評史」「中国文学理論史」「中国美学史」などにおける関連の記述、あるいは近年の論文における言及も丹念に拾い上げて、考察の俎上に挙げている。「詩」と「志」とが同音による規定であることから、議論は複雑に錯綜しているが、論者による整理によると、近代以前にはほとんど注目されることのなかった「志」について、大別して、喜怒哀楽のような「情緒的・非理性的」なものとして解釈するか、何らかの目的や考えなどの「理知的・理性的」なものと捉えるかという点に集約される。しかし、いずれもそれぞれ独自の視点からの分析はあるものの、自己の主張を述べるに止まり、果たして『尚書』における原義がどこにあったのかは、なお決しがたいとする。</p> <p>そこで、従来の議論をより先に進める方法として、論者は戦国期に現れる「志」の用例の分析を通して、「詩言志」の意義を解明しようとした。第三章「戦国期における「詩言志」の研究」、がそれである。</p> <p>戦国期における「志」の意義を明確にするため、論者はまず「志」が「情」などの感情表現を含んでいたかどうかを多くの用例を検討し、「情」が人の内面の「実情」や「情況」をいうのに対し、「志」は人の内面にあるものが思考や判断を経て「目的」「希望」「考え」という段階にまで高められたものをいう語であったことを指摘する。「志」に近いもの</p>	

は、『説文解字』でも互訓されているように「意」であり、感情レベルをいう語ではなかったと結論づける。「志」がより人為的、能動的であることは、出土資料の郭店楚簡『性自命出』の用例に「詩・書・礼学、其の始めて出づるは皆な人より生ず。詩は、有為にして之を為るなり。書は、有為にして之を言うなり。礼学は、有為にして之を挙ぐるなり」とあることを引いて、「有為」、すなわち人為的に作られたものが「詩」であると認識されていたことをいう。従って、当時において、「詩」は「能動的に自覚された目的や考え」と理解するのが妥当であり、「感情」的な要素は含まなかったと結論づける。従来は未見の新出土資料を利用して、議論を一步前進させたことになった。

では、戦国期においてそのように理解されていた「志」がどのような経緯を経て、感情を含むようなものとして考えるようになるのか。すなわち「詩言志」の解釈において、「詩」が感情の発露として認識されるようになった経緯を、第四章「漢代における「詩」の展開」と第五章『尚書』舜典篇と『毛詩』大序において考察する。

漢代に入ると、「詩」の出現理由に関する言及が見られるようになり、その中で社会の変動、とくに政治の衰退から「詩」が作られるようになったとするものと、それに付随して「詩人」個人の怒りや悲しみといった「感情」から生み出されたとする言説が現れ、これらは戦国期の発想とは一線を画する見方であると指摘する。漢代における「詩」に対する政治性の強調はその後の中国における文学の政治性の強さにも深く関わる問題であり、残された資料に限界はあるものの、戦国期とされる資料を含め、今少し深い掘り下げが求められる部分である。また、引用文献に言う「詩人」を「個人」に直接結びつけることも、古代にあってはやや性急な判断ではないかと思われる。ただ、こうした点に先秦から前漢末に至る時点での変化を見ようとする試みは評価できるものである。

一方、第五章において、『尚書』舜典篇の「詩言志」と『毛詩』大序における「詩は志の之く所なり。心に在るを志と為し、言に発して詩と為る」を比較して検討した結論は、従来看過されてきた問題を指摘したものであり、十分に評価することが出来る。『毛詩』大序は、これまでは十分な検討もなく、『尚書』舜典篇の「詩言志」を敷衍したものと考えられてきた。ところが、論者は『毛詩』大序の記述内容をよく検討して、『礼記』楽記篇との関わりの深いことを指摘し、両者の言うところは異なる部分があるとする。また、その成立時期についても、『漢書』礼楽志の記載との関わりから、これとほぼ同時期の前漢末という見解を提示した。これは、ただ単にこの章での論述だけでなく、前五章までで歴代の注釈史、研究史の丹念な調査を踏まえて、はじめて明確となった見解であり、本論文のひとまずの到着点とも言える見解となった。

本論文は、中国詩歌論の原点とも言える「詩言志」論について、それぞれの時代の文献資料を丹念に読み込み、その問題点を一つ一つ確認しながら、着実に論を積み重ねており、その執筆姿勢は高く評価できる。また結論部分における『尚書』舜典篇と『毛詩』大序についての見解も、従来の学者が見落としていた角度から切り込み、その指摘も妥当である。不足を言えば、魏晋から唐代にいたる中国詩歌の黄金時代に「詩言志」がどのように理解されていたかの論述が欠けていることであり、今後の継続した論考が待たれる。

そうした不足の点はあるものの、本論文が実証的に、また論理的に論を進め、伝統的な詩歌認識「詩言志」論に新しい成果をもたらしたこと、また今後このテーマでの研究の基礎を打ち立てたことなどにおいて高く評価することができる。よって、本論文は、課程による博士(文学)の学位を授与するにふさわしいものと判定する。

公開審査会開催日	2011 年 6 月 4 日		
審査委員資格	所属機関名称・資格	博士学位名称	氏 名
主任審査委員	早稲田大学・教授		稲畑 耕一郎
審査委員	早稲田大学・教授	博士(文学) 早稲田大学	内山 精也
審査委員	宮城学院女子大学・教授	博士(文学) 早稲田大学	田中 和夫
審査委員			
審査委員			